

**伝染病の特徴を知り予防しよう！**

近年、伝染病の発生件数が増えています。表は、25年度と今年7月までの釧路管内における件数を示していますが、ヨーネ病の他、BVD-MD（牛ウイルス性下痢・粘膜症）の発生が顕著になってきています。

表 釧路管内の主な家畜伝染病の状況

釧路管内における主な家畜伝染病				(戸数)	
年度	病名	ヨーネ病	BVD-MD	牛白血病	
H25		12	7	8	
H26/7月まで	新規	15	4	7	
	継続発生	11	6	8	

**◆牛ウイルス性下痢・粘膜症とは？**

BVD-MDとは牛ウイルス性下痢ウイルス(BVDV)の感染によって、流産や死産、呼吸器疾患、下痢、免疫低下などを引き起こす疾病で

す。

感染は接触感染、空気感染、胎盤感染などによって起こり、季節性なく発生します。また、妊娠牛が感染すると胎盤を通して垂直感染し、奇形や持続感染牛(PI牛)を出産します。図は親牛の感染時期で胎児がどうなるかを示したものです。

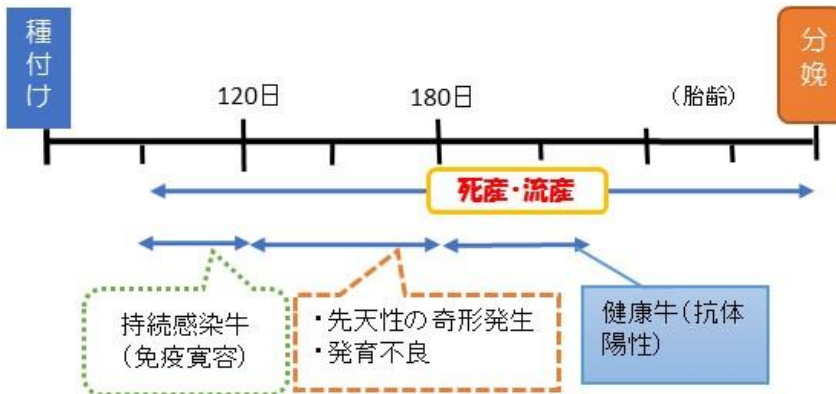


図1 感染時期の違いによる胎児への影響

ではなぜ問題となるのでしょうか？

外見上、正常な牛と見分けがつきにくく、生涯にわたり尿や鼻汁中からウイルスを大量に排出するので、牛群に感染し、農場全体が汚染源となります。

この持続感染牛(PI牛)が存在すると生産性に影響し、経営を圧迫しかねないことになるので、細心の注意が必要です。

●こんな状態はありませんか  
 ・近ごろ流産や死産が多く、虚弱な仔牛が増えた気がする  
 ・慢性的な下痢や発熱の牛がいて、牛群全体の状態がよくない



**予防対策を講じよう！  
 (一)ワクチンの接種**

感染した仔牛を産まれないようにするには、ワクチン接種をしっかりと行います。ワクチンには、生ワクチンと不活化ワクチンがありますが、妊娠牛に生ワクチンを接種すると、人為的に持続感染牛を作ってしまうことがあるため避けましょう。

各町では、定期的に予防接種を実施していますが、公共牧場を利用しなくても積極的にワクチン接種を行い予防に努めましょう。

(二) 病性鑑定を依頼する  
 「流産が多い」、「異常な仔牛が多く出生する」など、BVD-MDを疑うような牛については、早めに獣医師に相談し、病性鑑定を受けるようにしましょう。

(三) バルク乳検査で摘発可能  
 ウイルスは、乳汁中にも排泄されるため、バルク乳の検査で持続感染牛(PI牛)の存在がわかります。存在した場合は、農場の全頭検査により、陽性牛を見つけ出せます。陽性牛は淘汰するしかありませんが、慢性化させないためにも早期の発見・淘汰がBVD-MDの拡大を防ぐ上で重要です。